

氣を博したペルシア古典文学の中で神格化されたイスラーム以前からの英雄たちを、訳文中に縦横無尽に引き合いに出して、ムスリムの読者にも親しみをもたせているところにある。また、スーフィー的叙事詩の比喩表現も多用され、聖典視するヒンドゥー教徒の側からは、単なるロマンス叙事詩に改変されたと誤解を生む原因ともなっている。

第六篇「戦闘の巻」におけるラーヴァナに誘拐されていた間のシーターの貞潔を証明する「火の試罪」をめぐる、高貴な家系の名誉のためになされた戦闘でシーターを救出したと言いつつも、夫以外の男の家で暮らし、その膝の上で支配され、邪なまなざしにさらされた妻をそのまま受け入れることは、世間の非難の的になるという恐れからできないというラーマの離縁のことは、マシーフにはマジュヌーンのような嫉妬心と弱き心と映る。

その一方で、シーターの大地の女神の娘としての高貴な生まれへの自負や、夫に貞節を尽くし誠実であった姿を評価しないラーマへの不満や公衆の面前で離縁されたという不名誉への抗議のことばの雄弁さは、自ら「火の試罪」を実行するという意志の強さを描きつつも、美しい詩の中にかき消されてしまっている。だが、偶像崇拜者らに警告して火に投げ入れられても冷たくなった火により救われるアブラハムの姿に重ねられ、マルヤム(マリア)の本質をもつシーターの純潔や誠実さゆえに、火の中から現れ出る「命の水」に救われる愛の対象となる高貴なる美として試罪の炎の中に描き出される。

シーターは、浄化儀礼を受け入れる伝統の中で、イスラーム

以前から残る女神のイメージを残したペルシア古典文学の女性像に共通性を持ち、英雄的人間としてのラーマの妻であり、敬愛されるべき女性像としてペルシア語叙事詩の手法を生かして描かれたのである。

ヒンドゥー教寺院の内陣について

出野 尚紀

寺院の内陣を指し示すガルバ・グリハ *garbha-grīha* は、建築論書においてどのように記述されているのだろうか。また、寺院の中心として聖性をもっとも高い部分だが、どのように聖性を高めるのだろうか。それらについて、北インド系で六世紀の『ブリハット・サンヒター』*Bṛhatsaṃhitā* と十一世紀の『サマランガナーストラーダラ』*Samraṅganaśāstradhara* に南インド系の『マヤマタ』*Mayamata* の三文献を比較検討した。

土の埋め戻しや水の吸収具合などによって、土地の適不適を確認し、各ヴァルナに適した場所の特徴を確認し土地を選定する。儀礼段階として、土地を浄化するための儀礼であるヴァーストゥ・プージャ *vāstu-pūjā* を行う。

ガルバ・グリハについての具体的記述を見る前に、寺院の立地と構造を見ておきたい。浄性が高い場を選定することが場の聖性を高めることにつながると考えるからである。そして、本殿である祠堂が寺院全体のどの位置になるかを調べるために、どのように構成するかを確認したい。これは正式な入り口からの方角と距離、全体のなかのどの部分に存するか、また、他の

構成物との関係によって伺える意図を考察するためである。

『ブリハット・サンヒター』では、寺院の立地として、豊富な水を得られるところ、遊園林のあるところ、静水面の近辺でさまざまな水鳥たちが集まっているところ、川の合流点や中州など川の流れに面するようなどころ、森や川や山や滝の近辺、遊園林をもつ町の中、バラモンなどの敷地として適当なところがあがっている。ガルバ・グリハの大きさは、祠堂の横幅の半分となっている。

『サマラーンガナストラダラ』では、森の中、吉祥なところ、南北方向の街路に沿って、都市の中央、都市の内外と規定している。しかし、ガルバ・グリハについての確実な記述はない。

『マヤマタ』では、特定のヴァーストゥ・デーヴァターの場所、都市の中央、都市の周囲と規定している。ガルバ・グリハは、祠堂の大きさの三分の一、五分の三、七分の四、九分の五、十一分の六、十三分の七、十五分の八、十七分の九、または、半分が横幅と記している。

寺院の立地は、地上にあるが天界に近いということで聖性が高く感じさせたり、流れる水によって浄性が高く感じさせたりという特性を持っている。そして、周囲に小祠堂が併設され、中央部の持つヒエラルキーや聖性の高さを示している。都市などでは、中央という他よりも尊いとする場所に寺院を設定している。また、周囲に建てるものは、周囲と隔絶を計り内部の浄性を保つ守護神としての役割が期待されていると思われる。

プージャーによって、浄めが行われるので、浄性を高める働

きをする。ヴァーストゥ・プージャーは、土地選定のたびに繰り返行われるので、次第に土地の浄性が高まる。

ガルバ・グリハの広さについては、祠堂の大きさとの比例関係で表される。この割合は、敷地を三分割したときのダイヴァの部分にあたる。そして、祠堂の位置も、寺院の中でも浄性の高い位置であり、周囲の小祠堂によって祠堂の聖性が高められている。このように、ガルバ・グリハは周囲よりもプージャーの繰り返して浄められた聖性が高い場所である。

そして、三文献の内容比較から、古代には北インドでもガルバ・グリハが存在したが、十一世紀までに設定されなくなり、南インド系の文献に残っている。建築形体の分化が見られる。南インド系では塔状につくる祠堂基部に壁に囲まれたガルバ・グリハが存在するが、北インド系ではガルバ・グリハという場所がなくなっていることがわかった。

インドの歴史教科書における

ヒンドゥー・ナシヨナリズムの叙述

澤田 彰宏

本発表は、インドの国立教育機関(NCERT)作成の中等教育用歴史教科書において、ヒンドゥー・ナシヨナリズムがいかに記述されているかを検討するものである。

インド近現代史の大きな問題の一つは宗教対立(南アジアではコミュニズムと呼ぶ)であり、その帰結は印パ分離独立である。そして現代のコミュニズムの最大の問題はヒンドゥー・ナシヨナリズム(HN)である。これは究極的にはヒンド